

代表からのご挨拶

サンライズ・メイト・バート株式会社

代表取締役 井上 明美



いつも皆様方には、格別のご高配を賜り、厚く御礼申し上げます。梅雨入りが間近の季節となりましたが皆様お元気にお過ごしでしょうか。先日5/21茨城県潮来市水郷潮来あやめ園で3年

ぶりに復活した白無垢姿の花嫁が小舟に乗って花婿のもとに向かう恒例の「嫁入り舟」が行われました。川沿いに集まった方々からは大きな祝福の拍手が送られたとの事。どんな環境になっても私たちひとりひとりの見えない心にある希望の灯を消す事は何人たりともできないと思いました。コロナ禍と梅雨で運動不足になりがちですがお体にはくれぐれも気をつけてください。

サンライズの物語

最後だから伝えられる——

家族の見えない絆について考える物語



その方は、両下肢に少し浮腫があり介護認定が下りたらデイサービスでの通いリハビリを希望していた方でした。

奥様は数年前に亡くされ、近所に住んでいる長女が食事や家事などを行っていました。娘さん曰く頑固な人で長男、次女とも仲たがいがいしてしまい疎遠になっていると言われていました。

そんな中両下肢の浮腫が悪化し精密検査の結果、胆管癌を診断され、みるみるうちに体力が低下してしまっていたのです。

2階が寝室だったのを1階に移しベットを借りた矢先、一人ではトイレへも行けなくなったのです。娘さんが世話をすると「ありがとうね」と何度も感謝の言葉を口にしたとの事。

亡くなる当日疎遠にしていた子供たちが傍らに来た時に、自分が居なくなった後の事を子供たちに託したとの事でした。

お悔みの言葉を伝えに行った時、娘さんが「最後まで父の世話ができて今まで話せなかったことまで話ができ、長年わだかまりがあった父という人を少し理解ができたような気がしました」と話されました。

人生の幕を引くときに残された家族に伝える言葉・・・今まで言葉にできない感情を伝える大切さ・・・最愛の家族を介護することは、辛いことばかりではないと思いました。

サンライズのデイサービス陽光だより



バラ園へ外出レク

皆さん「色んな色のバラがあってすごく綺麗ね～」と言われ喜んでいました。

施設の前の花壇を季節の花に

大きなピンクのマーガレットの花は職員の叔父様から調達した花です。咲くのが終わったら返却し手入れをしてくれるとの事。感謝、感謝です。



NEWS 今月のニュース

親子で介護職 誇りのポーズ 世代を超え同じ仕事 やりがい伝えたい

八日の「母の日」に合わせ、一般社団法人「KAIGO PRIDE (カイゴプライド)」(東京都)は七、八日の両日、介護職として働く富山県内の親子のポートレート展を富山市内で催す。世代を超えて選ばれる介護の仕事のやりがいや魅力を写真を通じて発信する。(山岸弓華)

インド出身のカメラマンで、日本を拠点に活動している東京都在住のマンジョット・ベディさん(52)が二〇二〇年に法人を設立。介護にまつわる「きつい」「大変」といったネガティブなイメージを払拭し、介護職員に自らの仕事に誇りを持ってもらおうと、現役職員を被写体とした撮影会を全国で開いている。今

回、県介護福祉士会が協力してモデルの親子を募った。

四月上旬に富山市安住町で行われた撮影会には十一組の親子が参加した。自らカメラを構えたベディさんは、慣れない撮影にぎこちない様子の親子に「もっとお互いに近づいて」と声を掛けて緊張をほぐした。撮影が進むにつれて表情は柔和になり、手を取り合ったり、抱き合ったりするなど多彩なポーズでカメラに収めた。

息子の徳馬さん(20)と参加した山西由加さん(50)＝富山市＝は「今回の撮影を親子の新たな出発点として、今後もお互いに高め合っていけたら」と笑顔。母の松本かなみさん(49)と撮影に臨んだ娘のかのんさん(20)＝立山町＝は「改めて介護の仕事頑張ろうとい

う思いが芽生えた」と話した。

ベディさんは六日、新田八朗知事を訪問し「介護の現場は、ありがとうであふれている。クリエイティブの力でイメージを変えていきたい」と語った。同席した県介護福祉士会の舟田伸司会長は「介護の仕事を通じて、子が成長した様子も写真から見て取れる。介護の魅力を県内外に発信していきたい」と話した。



カメラを構えるマンジョット・ベディさん(左)の前で、ポーズを取る山西さん親子＝富山市安住町

<中日新聞 2022/5/7(土)>

広報誌「ライジング・サン」のバックナンバーは、弊社ホームページでもご覧いただけます。

ぜひお立ち寄り下さいませ。 <http://www.samaba.jp/back-number/>